

北京のいちばん寒い冬

夏之炎

溝口栄訳

文藝春秋

北京のいちばん寒い冬

定価一三〇〇円

一九七七年二月二十日 第一刷
一九七八年四月一日 第四刷

著者 夏之炎

訳者 溝口 栄

発行者 阿部亥太郎

発行所 株式会社 文藝春秋

T-102 東京都千代田区紀尾井町三

印刷 凸版印刷
製本 大口製本

万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

目次

序章

第一章 二月十日——旧曆十二月二十七日

23

第二章 二月十一日——旧曆十二月二十八日

145

第三章 二月十二日——旧曆十二月二十九日

197

第四章 二月十三日——旧曆十二月三十日

261

第五章 二月十四日——旧曆十二月三十一日

317

終章 春節

339

あとがき

装幀 竹内和重

見返し地図 高野橋康

本文地図 原理

カバー写真 共同フォト提供

北京のいちばん寒い冬

主な登場人物

賈向東……ソ連留学の経験をもつ中央警衛師団第六

課課長。

ナターシャ……ソ連留学時代の賈向東の恋人。ソ連

の駐北京情報工作グループの一員。

肖大勇……革命に忠実に生きようとする知識青年。

抜擢されて北京市都市民兵の団長となる。

齊燕……肖大勇が思いを寄せる同級生。

齊大媽……齊燕の母。

小虎……齊燕の弟。下放された人民公社から逃げ帰

り、同じ境遇の仲間とグループをつくる。

肖美蓮……賈向東の妻。肖大勇のいとこにあたる。

肖連民……肖美蓮の父。北京市の政治委員。

ストロフスキー……ソ連の情報工作グループの組長。

ウェイシンスキー……ストロフスキー・グループの

副組長。

諸葛亮……疎外された下放青年の地下組織の首領。

夏佑民・李大個子・徐大砲・老公羊・閔理培……諸

葛亮グループのメンバー。

任長風……「人民軍委員会」のリーダー。

劉場長……内蒙古の七四国营農場の農場長。

李培義・大喇叭……七四農場で働く青年。

言鵬飛……北京市連合行動委員会のリーダー。

* *

汪東興……中国共産党中央弁公庁主任。中央警衛師

団師団長。

張春橋……副首相。上海グループの一人。

王洪文……党副主席。上海グループの一人。

姚文元……中央政治局委員。上海グループの一人。

吳德……北京市革命委員会副主任。

謝靜宜……北京市革命委員会書記。首都民兵の指揮

をとる。

花総理……対立する二派の間で苦悩する國務院総理。

黎副総理……クーデター計画の阻止に奮闘する実務

派の実力者。

焦部長……黎副総理の片腕となって働く外交部部長。

主席夫人……クーデター計画の首謀者。

序 章

ぼんやりとかすんだ大きな太陽が、西空をよぎる黒い雲の隙間に見え隠れしている。と見る間に、太陽はいっそう大きさを増しながら、果てしなくつづく燕山山脈の端にするすると落ちていった。天空には、名残りの夕靄がうっすり赤味を帯びた紫色に映え、見渡すかぎり山々の嶺は、激しく燃えあがる山火事のように真っ赤に染まっている。東南の空の隅からしのびでてきた夜の気配が、地平線まで伸びた広大な華北大平原の涯（ほとり）と入り混じり、すでにねずみ色に融けあいはじめていた。

首都北京の西にある香山、その小高い丘に向ってアスファルトの道路が通じている。今しも四台の黒塗りの乗用車が風を切って疾走している。臥仏寺の年経た白壁の塀を過ぎてまもなく、舗装された道路は、南へゆるやかにカーブして松林へ入った。車はまっすぐ西南に向って変らぬスピードで疾駆していった。

三十分後、速度を落した四台の車は、赤と黄の二色でまだらに塗られた鉄製の遮断機の前で停った。車の強いヘッドライトに照らされて、遮断機の後方にモルタル塗りの鉄筋コンクリートの建物がくつきりと浮びあがった。道に面した宿直室の並びにはいくつか大きな木のドアがある。どれもキッチリ閉まっている。建物の後ろには、四階くらいの高い展望塔が、あたりをはらって屹立している。監視所である。

とつぜん、監視所の巨大な投光器が光り、遮断機の向うに広がる地面を幅五、六十メートルにわたって照らし出した。保安のためであろう、一帯の地面は、そこに一步でも踏みこめば足跡がはっきり

と残るように、柔く掘りかえしてある。さらに、高さ三メートルばかりのY字型のコンクリートの柱が立ち並び、それに鉄条網と白い罫子^{がし}が嚴重にはりめぐらされて光っている。かなたの山のふもとまで延々とのびたその鉄条網は、巨大な蛇が地を這っているように見えた。

遮断機のところで車を制止した監視所の兵士は、カーキ色の木綿の軍服上衣に、ブルーの同じく木綿のズボンをはき、茶色のベルトをしめている。中央警衛師団の当番兵である。彼は本部への連絡電話の受話器をおくと、もういちど車の中をのぞきこむようにして人数を確認し、やっと重い鉄パイプの遮断機を上げた。四台の車はふたたび走りだした。車の速度を制限するためであろう、道は正確にじぐざぐ型を描いている。トーチカのある丘の裾をぐるりとまわりこむと、それから真っすぐな道路が西に向っている。

やがて奥深い峡谷に入った。途中もういちど先ほど同じような嚴重な検問を受けて、やっとある盆地の南の「入口」に到着した。ほぼ百平方キロはあろうと思われるその楕円形の盆地の中央に、改修工事をすませた小さな湖があった。南の入口から見ると、湖に至る唯一の道路が、盆地の南半分をちょうど東西二つに分けるようになっている。道の左側には二階建の宿舍四棟がずらりと数十列もたち並び、その間に食堂の大きな建物がはさまっている。西側の山裾によったところは広い練兵場になっており、その片隅にバスケットボールのゴールが二つむかいあって立っている。

道路の右側には、瓦屋根の平屋の建物が並んでいる。十あまりある事務室それぞれを長い廊下がつないでいる。どの建物のガラス窓からも電燈の明りが洩れていた。夜勤の幹部が大わらわで全国各地へ指示を送ったり、資料の収集や整理分析に余念がない。高くそびえたつ煙突からは、地下発電のボイラーの油煙が白くゆらゆらとたち昇っている。吐き出された煙は、東の山腹に立つ電波塔の高さまで上ったところで、強い北西の風に吹きとばされ、スッと視界から消える。

四台の乗用車は静かに斜面を下って湖のほとりに出た。車はそこを右に折れてしばらく湖畔の道に沿って走り、東岸にたつ工字型の迎賓館の前で停った。車から十人ばかりの人が降りた。彼らは無言のまま北へ向って足早に歩いていった。

迎賓館の背後に、湖の北岸から山裾にかけて、広い平坦な草地が広がっている。荒々しい大きな松の繁っている崖が、三方からその草地をとり囲んでいる。ほぼその真中に、瓦葺きの宏壮な一階建の建物が見えた。四つの棟が一本の廊下で通じている。花崗岩で築かれたメートルほどの土台が、いかにもがっしりとした重厚な気魄を表わしている。そこに、軍人用の外套をまとった堂々たる体軀の男が二人立っていた。比較的年のいった、角ばった顔に濃い眉の男は、元公安部副部長で現中国共産党中央弁公庁（事務局）主任兼中央警衛師団師団長の汪東興である。その後ろに立っている四十前、色黒の面長な男は、瀋陽軍区政治委員の毛遠新である。

二人の男のほうへ歩いていく一団の中で、黒い公務用のカバンを手にしっかりかかえて先頭に行くのは、中央政治局常務委員会委員兼副首相の張春橋であった。張春橋は二人の男が誰であるかを認めると、ひとり小走りに石段をかけのぼって、注意深く小声で汪東興にたずねた。

「いったい何が起こったんです。主席夫人はお元氣ですか」

汪東興は、その濃い眉をすくめるようにして遠くの山嶺をじっと見すえ、口をつぐんだままだった。張春橋に少し遅れて残りの人たちが近づいてくるのを待って、汪東興は突然手をふって、身を翻して建物の中へ入っていった。張春橋もあわててその後を追った。

張春橋より遅れてやってきた王洪文たちは、入口で待っていた毛遠新との挨拶もそこそこに、次々にドアを押すと、建物の中央に位置する大きな部屋に入っていた。

そこはゆうに三部屋分の広さのある大広間だった。白亜の壁に木窓のセピア色がきわだった印象を

与える。窓と反対側の壁には大きな廬山の風景写真がかけてある。部屋の中ほどに、白いテーブルクロスをかけた二十人以上はむかい合えようという長いテーブルが据えられ、その上の、青磁に白紋をあしらった首の長い大花瓶に、三本ばかり満開の梅の枝が挿してある。それが風雅で清々しい室内の雰囲気より強くもしだしている。

部屋の隅では、大人の背ただけほどもある鋳物のだるまストーブに、火が真っ赤に燃えさかっている。外の寒さをすっかり忘れさせるぐらい暖かった。

上海市革命委員会書記兼上海軍区政治委員の馬天水は、中国のなかでも南方の生活が長い。急な呼出しで何の準備もなく、薄着のままやってきた彼は、車を降りてから、キリキリ肌を刺すような冷たい風に吹かれて十分近くも歩いてきた。背骨の奥まで寒さがしみこんでいた。部屋に入りこの春のような空気にふれて、やっと寒さによるしびれがとれ、身体中がじんわりほぐれてくるようだった。

しかし、汪東興のきびしい目の光ときたい沈黙、毛遠新のかすかに不安の色がただよう表情を見たとき、馬天水は異常な静けさに^け気おされ、思わず背筋に寒さに似たものを覚えるのだった。

この日、午前九時から、上海市郊外竜華工業地区の党委員会では、馬天水を中心として重要な会議が開かれていた。同区の各工場の革命委員会の主任と書記、それに労働組合、共産主義青年団、民兵組織の責任者なども出席して会議は始められた。討議は、どうすれば日々深刻になる労働者の規律のゆるみを克服でき、生産の向上を図れるかに集中していた。

各工場はそれぞれ現場報告をし、数字をいくつも列挙した。しかし、ひとつたび解決方法となると、その場のしぎか現実味のうすい方法が提出されるばかりで、問題の本質を深くえぐる方策はでてこな

かった。もちろん、昔の規定を復活してそれを労働内容の審査と処分の基準にするのが、最も効果があることはわかっているのだが、そのことは誰も口に出せないでいる。鄧小平たち走資派の批判があつてからというもの、この制度をあえてとりあげる者は一人もいない。奨励金と出来高払い賃金制度は物資で人を刺激する誤った主義、つまり劉少奇の修正路線とみなされ、やはり通用しない。

今はただ思想教育という路線の中に何かい方法を見つけないならならぬのだ、と馬天水は考えた。たしかに、政治運動はこの十数年間、次から次へと休む間もなくつづけられてきた。強い鋼の弦でさえ、長い間びんと張りつめたままだと、いつかブツリと切れてしまうものだ。ましてわれわれ人間の神経である。だが、たとえそうではあつても……。

全中国が悲しみのどん底につき落されたあの九月以後、主席逝去を追悼しようという人々の気持が、一時的に生産を好転させた。しかし悲しみが薄れるにつれて、事態は以前にもまして深刻になった。

この会議室に集まった幹部たちも、口をそろえて主席の遺した指示を忠実に遵守して職務を遂行するとはいつているが、各人がそれぞれの立場にとらわれていて、実際の職務では互いの仕事を妨害しあっている。団結して、エネルギーを一つにしようとする気がない。明らかに党組織と労働組合の中に走資派が忍びこんでおり、その力を次第に強めているのだ。走資派というのは、固有の名前と顔を持った何某という個人ではなく、思想なのだ。よくない傾向に屈服したおくれた思想なのだ。それは困難な情況の下で猛威をふるい、革命に忠実な幹部をも虜にしてしまう可能性がある。

この思想問題を解決しないで、他の問題の解決は望めない。そのためには思想的に最も堅固な民兵組織にたよるしかないだろう。

当初、都市民兵は、青年党员や共産主義青年団あるいは積極的な青年の中から政治意識の高い者を選んで組織され、まず各工場に連（四十数人の単位）、排（十数人の単位）がつくられた。任務は工場内

のよくない現象を暴露し、檢舉し、それと闘うことであつた。はじめのうちはかなりの成果をおさめたが、日がたつにつれて民兵組織と、既存の党、団、組合などの組織との間に混乱を生じ、ある職場ではセクトの対立を招いたりした。

上部が団結していないと、下部には放縦ほうしやうの氣風が生まれる。労働者は平氣で遅刻、早退をするようになり、長期欠勤も出てくる始末だ。生産は停滯し、品質管理もできない。こうした風潮が會議に提出されたが、対策は見出されなかつた。

すでに討論は延長され、時計の針は午後二時をまわっている。これぞという結論も出てこぬまま重く澱んだ會議の空氣の中で、馬天水は張春橋の鋭い目差しを思いうかべては、内心焦りという感じを感じていた。もともと上海市を指導していた張春橋、姚文元、王洪文の三人が中央に拔擢、派遣されると決つたときのことである。馬天水は張春橋によられた。

「われわれ三人は行つてしまふ。有能な幹部も何人か連れていくので、残る君には困難なこともふえるでしょう。だが必ず持ちこたえてもらわねばならない。自信はありますか？」

たずねるかたちはとつていても、眼鏡ごしに馬天水の目を食い入るように見つめる張春橋の目には、否といわせない力がこめられていた。

「あなたがたが中央で私たちを支持していてくれると思えば、もちろん自信があります。こちらで何か問題が起りましたら、すぐ電話で連絡いたしますから、ご指示ください」

「それはだめだ。われわれが中央で遭遇する問題は、もっと多くさらに困難なのだ。君には、自分の問題を解決するだけではなく、われわれ中央の仕事まで助けてもらいたいのだ。それには少しでも早く幹部を養成して、中央に送りこんでほしいのだ」

「わかりました。人民大衆をよりどころとして……」

「いや、大衆というものは組織し、指導する対象であって、それを頼りにするものではない。われわれが指導しなくても誰かが指導する。指導権をみすみす他のものに奪われていいのですか。いいですか馬同志、この上海は革命発祥の地であると同時に、いま残っている革命の根拠地の中で最も重要な都市なのです。われわれは中央へ行き、全国的な闘いを推進します。この大事な拠点に残る君は何をしなければならぬか、はっきりとわかっているはずですよ。この仕事はやり抜くしかないのです」

張春橋の強い語調が今も馬天水の耳の奥にこだまのように残っている。

みんながそれぞれに黙りこんで深い思いに沈んでいたとき、ふいに会議室のドアがあくと、顔を紅潮させた楊小兵書記が入ってきた。彼は上海市党委員会でもっばら王洪文党副主席の仕事の手助けをしている。はげしく息をはずませている。エネルギーに満ちたこの若者は、階段を三階まで一気に駆けのぼってきたらしい。彼はみんなの鋭い視線にさらされながら、馬天水に手紙を手渡した。封を切ってみると、党副主席が多忙の中を急いでしたためた書面だった。王洪文は華東地区でもっばら都市民兵と新農村の民兵の強化工作にあたっている。

「緊急要件あり。ただちに江湾飛行場にて会いたし。 洪文」

四十分後、江湾飛行場にジェット機が着陸した。それを待っていたように一台の中型ジープが走りよっていった。王洪文と馬天水の顔が見える。王洪文、馬天水その他四人の幹部はアルミのタラップをのぼり、機内に入った。そこに杭州から飛んできた張春橋らの顔があった。

張春橋副総理は外国の賓客につきそい杭州へ遊覧に行っていた。が、「遊覧」というのは表向ききの理由で、ほんとうの目的は主席元夫人賀子貞の動きをさぐることであった。

賀子貞は江西ソビエト時代に中共中央によって正式に主席との結婚を認められた妻である。主席との間に二男一女がある。女の子は長征の途中、四川で誕生している。そのとき身重の体で主席につき従っていた賀子貞は、生まれた女兒をその地の革命大衆の手に託すと、ふたたび主席といっしょにあらゆる苦勞をなめ尽して陝北にたどり着いた。産後の休養もできぬまま、風雪にさらされ飢えと寒さの中を何千里も歩きつづけてきた彼女は、延安に着いたときにはすっかり衰弱していた。しかし、幸いにも他の指導幹部の家族の手厚い看護を受けて回復した。離れ離れになっていた前夫人楊開慧（故人）の二人の男の子も無事延安に届けられ、賀子貞のもとで育てられた。

まもなく延安は、全中国の革命青年が目ざす聖地となった。若く美しい女優藍蘋も上海からやってきて魯迅芸術学院の学生となった。一九三八年、主席が学院で政治講演を行なったとき、二人はじめて出会った。向学心に燃え、新知識新理論を情熱的に追求する美貌の女子学生は、それからまもなく、中央委員が集まっている会議室の洞窟に姿を現わし、各委員に楽しそうに告げた。

「みなさんに素晴らしいニュースを報告します。私はすでに主席と一緒に暮らしています！」

このニュースは居あわせた人々にとってちっとも素晴らしくなかった。離婚歴があり、何度も同棲の経験もあり、おまけに延安に来る前には、有名な男優の唐納（フランスで中国料理店を開き、今は南米にいるといわれる）の自殺未遂事件というピンクスキヤンダルで上海中をアツといわせた女主人公が、こともあろうにプロレタリア階級の先鋒隊、中国革命の先駆け、中国共産党の理想的な指導者の妻になるというのだから、革命の名を著しく傷つけ、人民の共産主義革命政党に対する信頼を損なうおそれがあった。劉少奇ははっきりと反対意見を出した。他の中央委員も同意できないといった。康生が折衷案を出した。藍蘋は対外的には「愛人」ということにして、主席の生活の面倒をみるだけで、いかなる政治活動、対外活動にも参加できないことが決定された。

しかし、この決定は、賀子貞にとってたいへんなショックであった。彼女は毎日、子供を連れてはあちこちで泣いて訴えた。放っておいては主席の威信にも影響するので、ノイローゼを治療するとう名目で、彼女は子供とともにソ連に送られることになった。ソ連は病氣治療に送られてきた賀子貞を中国共産党主席夫人として迎え入れた。延安はやっととの静けさを取りもどした。

数年後、中国全土は解放された。混乱のようやく収まった一九五〇年秋、ソ連が用意してくれた専用機で主席夫人は帰ってきた。飛行場に迎えに出た人たちの中には劉少奇夫人王光美、朱德夫人康克清、周恩来夫人鄧穎超、李富春夫人蔡暢など、新しい中国の指導者の夫人たちがいた。彼女たちはみな賀子貞の友達で、彼女に同情していたのである。飛行場には康生も来ていた。賀子貞は到着するとすぐに康生に付き添われて、別の飛行機でまっすぐ杭州へ飛んだ。

風光明媚な杭州の西湖の湖畔に暮らすようになってからというもの、賀子貞はずっと陳毅の援助をうけていた。毎年冬になると、北京の寒さを避けて主席は杭州にやってきて、そこで一、二カ月を過ごすといった。

一九六六年、文化大革命が起った。それまでは主席夫人の称号は賀子貞だけのものではあったが、文化大革命以後、この称号は、主席の革命思想を深く理解し、具体的な行動で主席の路線を守る「愛人」の方へ移っていった。

一九七六年九月、「偉大なる赤い太陽」と称された主席が逝去した。その葬儀委員の名簿をつくるにあたって二つの意見が出た。一部の幹部は、賀子貞と主席の長男も入るべきだと主張したが、この意見はすぐさま別の幹部たちに反対された。このことは逐一新しい「主席夫人」にも報告された。「主席夫人」は、ばかばかしいことだと笑いとばしながらも、一方ではこの動きを軽視できないと思った。なかでも杭州を訪問する人数がふえているという知らせには、きつと何か問題がひそんでいる